佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（四）

――筆談が生んだ「誤解」――

河野龍也

一　はじめに

前稿「佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（三）――東熙市と鄭享綬――」を『實踐國文學』八四号（二〇一三・一〇）に掲載して以来三年半が経過した。中国語の厖大な郷土史文献と向き合い、現地訪問や一次資料の調査、関係者への取材などから作品の背景を洗い出そうとする試みは、当初予想した以上に遅々とした歩みになった。約一世紀前の、しかも外国の、たった二週間の旅の実態を今になって把捉することがいかに困難かを実感している。

だが、従来手掛かりがなかった春夫の同行者の〈鄭〉が、厦門で新時代の教育を受け、民国初期の反袁運動に同調した鄭享綬であることをほぼ明らかにできた前稿は大きな収穫であった。『南方紀行』の記述を、情報源に遡って検討する新たな読解の足場が得られたからである。これは楊承淑の「譯者與他者：以佐藤春夫的臺閩紀行為例」（『東亞觀念史集刊』二〇一五・六）によって台湾に紹介され、鄭享綬の名は中国語圏でも認知され始めた。楊の論文は、春夫の同行者が「通訳」として担った文化的媒介者としての役割を評価したものである。

ところで、二〇一二年三月に連載を開始した当初、本稿では『南方紀行』各章の成立順に応じて論考を順次『實踐國文學』に掲載する予定であった。だが、その後様々な発表の機会に恵まれ、本稿に関連性の強い内容を別媒体に掲載する場合もあった。具体的には以下のものがある。

1. 「佐藤春夫『南方紀行』の路地裏世界―厦門租界と煙草商戦の「愛国」」（『戦間期東アジアの日本語文学』（アジア遊学一六七）二〇一三・八）。『南方紀行』第一章「厦門の印象」を都市論から扱ったもの。
2. 「佐藤春夫、台湾で居候になる―インタビュー・東熙市一家の記憶から―」（『実践女子大学文芸資料研究所年報』二〇一四・三）。春夫の旧友で鄭享綬の師にあたる歯科医・東熙市の経歴を家族の証言と写真から辿ったもの。
3. 「古都に〝幽霊屋敷〟を訪ねて」（辻本雄一監修・河野龍也編『佐藤春夫読本』二〇一五・一〇、勉誠出版）。研究成果の概要紹介。
4. 「言語体験としての旅―佐藤春夫の「台湾もの」における「越境」」（『跨境／日本語文学研究』二〇一六・六）。第一章「厦門の印象」と第四章「鷺江の月明」を例に、「私」が〈日本人〉と〈異邦人〉という二つのアイデンティティを使い分けていることに注目したもの。
5. 『佐藤春夫没後五〇年国際シンポジウム「佐藤春夫と〈憧憬の地〉中国・台湾」展に寄せて』（二〇一六・一〇、新宮市立佐藤春夫記念館編・発行）。研究成果の概要紹介。

以上は本連載との縁故を明らかにするにとどめ、通覧の便宜のためには成果を一書にまとめる機会を得たい。

さて、本稿では「鷺江の月明」章を中心に、作中に登場する現地語（閩南語＝福建南部・台湾地方に使用者の多い言語）の語彙表記が、どの程度正確なものかを考えてみたい。それは旅行中の春夫の取材の状況や、「誤解」が発生するメカニズムを知る有力な手掛かりとなるはずである。なおこれは、二〇一六年六月二五日、厦門大学で開催された「〝东亚内部的自他认识〟学术研讨会」（厦门大学外文学院日语系主催、日本国際交流基金北京日本文化中心後援）における発表「佐藤春夫が描いた厦門―体験の現場と創作の風景をめぐって―」の一部である。

今回、厦門旭瀛書院訓導徐朝帆のご長男・世雄氏から、貴重な写真と資料をご提供いただけたのは僥倖だった。連載附録の「関連人物誌」に掲げ、あわせて既出の人物情報に関する補遺や、その他の註釈情報を蓄積する欄も新たに設けることにした。

二　ノートに〝書かれた〟閩南語

一九二〇年夏、台湾・福建を旅した佐藤春夫の旅行記は、訪問先の政治状況や社会状況にも筆が及ぶ「文明批評」の

要素を兼ね備え、単なる名所紀行を超えた「現代」へのまなざしを特徴とするものである。ただしその情報は、実際の見聞と個人の印象に基づく経験的なもので、必ずしも資料的な裏付けを経たものではない。そのため、春夫の批評的記述には、情報提供者の主観が大きく影響したことになる。また、日本語による情報提供者が多かった「台湾もの」の場合に比べ、『南方紀行』の場合、慣れない英会話で得た不完全な情報を想像で補った部分が多く、誤りや盲点がさらに発生しやすい構造があったことも最初に確認しておく必要がある。だが、それにしても、春夫はなぜ、第五章「漳州」の中心人物の一人である「許卓然」の名を〈許督蓮〉などと誤ったのだろうか。あるいはこのような問いを立てることで、春夫の文化理解の経路にまつわる問題の一端が見えてくるのではないか。

ここで注目したいのは取材ノートの存在である。互いの言葉を知らない日本人と中国人とが意思疎通を図る場合、有効な手段になるのが筆談である。文中には、記憶しておきたい事柄や、会話中の分からない単語をノートに書き取る〈私〉の姿がしばしば登場する。〈手帳〉〈懐中記事冊〉と呼ばれるこのメモ帳は実在したらしく、旅行記を作成する際に活用していたことを春夫は後年の文章で次のように明かしている。

> 性来不精者の自分はそのノートといふことを一切しない。六七年前台湾から厦門の方へ旅行した時には極く簡単な日録見たやうなものを作つて置いた。ところが紀行文を書く段になつて、どんなに簡単でも日録のしてあつたところは直ぐに何かと思ひ出されたが、それの抜けてゐるところはどうもよく思ひ出せないで困つたことがある。（略）私の旅行日録といふものは、小さな手帖へホンの五六頁で二三週間分を書き込み、その手帖の他の部分には支那人との筆談などがあつたり、花の名前や鳥の名前やその外いろんな名刺などが挟つてゐたが、それらのものが、日録と照応して自分一人には非常に細かく役に立つた。[1]

残念ながら、佐藤家資料からいまだこのノートは見つかっていない。しかし、どのような事柄を春夫がメモしていたかは作品からある程度まで推測することができる。ノートの存在に直接言及されるのは、次の八つの場面である。

1. 鄭が章美雪の婚約者・黄禎良の名を書く場面（26頁）
2. 章美雪の墓標をスケッチする場面（26頁）
3. 瞰青別墅の門柱に彫られた対句〈此地有人長寄傲／問天假我幾何年〉をメモする場面（27頁）
4. 鄭が鷺江八景（鼓浪洞天、白鹿含煙、虎渓夜月、鳳山織雨、金鶏暁唱、龍鬚土橋、万石洗心、雲頂観日）を列挙する場面（30頁）
5. 鄭が漳州の人口、地勢、産物（米、紙、砂糖、芭蕉果、荔枝、竜眼肉、筍、糸、印肉、水仙花）、名所（公園、仰止亭、考棚、西門外、南靖橋、南院）等を予備知識として書く場面（30頁、内容は61頁）
6. 集美への舟の中で八日分の日記をつける場面（同）
7. 集美学校の青年がなぞなぞを説明するのに〈謎灯〉

鼓浪嶼の基督教墓地　作中の〈基督女徒蔡門車氏寝室〉。隣が〈待主復臨〉（2008年撮影）

瞰青別墅の門柱　日光岩の裾にある黄仲訓の別荘。作品に登場する門柱は2016年にも現存を確認。春夫のメモは刻まれた文字と正確に一致（2008年撮影）

と書く場面（34頁）

8．鄭が集美の帰路に見た魚の名を〈神魚――白鰐。〉と教える場面（39頁）

直接的な言及があるのは以上の通りだが、『南方紀行』には記憶だけでは到底書けそうもない情報が数多く含まれており、ノートの内容はこれ以外にもかなり多岐にわたっていたことが想像される。特に閩南語が多用される第四章の「鷺江の月明」は、メモがなければ絶対に成立しなかった章と言えるだろう。集美学校参観の帰路、鼓浪嶼に戻る海上で見た夕景色に興を催し、林季商の邸（鼓浪嶼宮保第）から林正熊を誘い出して寮仔後の妓館に遊びに行く顚末を描いたこの短い章のなかに、実に二九例もの閩南語が登場するのである。これは『南方紀行』でも特異といえる数である。恐らく春夫は、中国の伝統音楽の素晴らしさを紹介するこの章を、言語表記の上でも異国音楽風に演出しようとしたのではなかろうか。春夫の遊び心と実験精神が垣間見えるような試みである。

ここに登場する閩南語を一覧にしたのが【表】である。こうして集めてみると、春夫の閩南語表記には原則二種類のものがあることが分かる。意味を示す漢字にカタカナでルビを付す場合と、漢字のあとに教会ローマ字式で発音記号を付す場合とである。前者は春夫自身が聞き取ってメモすることも可能だが、後者は専門的な知識を必要とし、鄭に書いてもらうか、後から辞書で調べなければ不可能である。

教会ローマ字式は一九世紀中葉に布教のため開発された閩南語の表記法であるから、教会学校出の鄭（あるいは周）ならではのリテラシーを「鷺江の月明」に指摘できるはずである。ローマ字式の例は音楽用語に集中しており（8～17）、総じて極めて正確である。しかし、ここにはある特徴的なミスが存在し、それがかえって厦門における春夫の原体験をありありと伝えてくれるように思われる。

例えば、16の〈開天冠〉である。春夫はこれを〈北館――北方支那風の音楽〉を代表する曲目と理解していた形跡がある。しかし、〈北館〉pak-kóan の正しい表記は「北管」pak-kóan であり、〈開天冠〉khui-thian-koan も正しくは「開天官」khui-thian-koaⁿ とあるべきである。発音のみに基づいて後から漢字を当てた場合に起こりがちなミスである。「開天官」とは、〈陰暦初一十五。客須開天官。即唱天官賜福一齣也〉[2]〈毎逢朔望前後。熟客往者多開天官。爲其所暱作面子。無分大小堂均十元〉[3]とあるように、陰暦一日と一五日に、妓館の馴染客が北管扮仙戯の曲目「天官賜福」を盛大に演奏させて面子を施すことを指す花柳語彙であ

【表】「鷺江の月明」章に登場する閩南語の一覧

No	春夫の表記	漢羅／教会羅馬字	No	春夫の表記	漢羅／教会羅馬字
1	シンヒイ 神魚	神魚 sîn-hî	16	開天冠（Khui thian koan）	開天官 khui-thian-koa^{n}
2	ベーゴオ 白鰐	白鱷 pe̍h-go̍k	17	打茶圍 （Khui le poa）	開茶盤 khui-tê-pôa^{n}
3	ガツトライヒヨン 月 來 香	月來香 go̍eh-lâi-hiong	18	ガンマ 柑仔	柑仔 kam-á
4	ゲイトワ 藝者	藝妲 gē-tòa^{n}	19	キヨーア 却仔	卻仔 khioh-á
5	シヨウフウクイ 小 富 貴	小富貴 sió-hù-kùi	20	アチヨオ 阿招	阿招 a-chiau
6	コエチイ 瓜子	瓜子 koe-chí	21	ギムマ 錦仔	錦仔 gím-á
7	チンスイ 眞美	眞 súi（婿） chin-súi	22	ゲフユア 玉葉	玉葉仔 gio̍k-hio̍h-á
8	琵琶（Gi pe）	琵琶 gî-pê	23	ホオギア 寶玉	寶玉仔 pó-ge̍k-á
9	絃（Hian）	絃 hiân	24	ホオチン 寶青	寶青 pó-chhi^{n}
10	爆鼓（Piak ko）	爆鼓 piak-kó͘	25	ホオレン 寶蓮	寶蓮 pó-liân
11	鑼（Ro）	鑼 lô	26	コオライチエ 再來坐	閣來坐 koh-lâi-chē
12	喇叭（Cahe）	吹 chhe	27	ウナ　キア Una　Kia	勻仔行 ûn-á-kiâ^{n}
13	大錞 （Ta chhim）	大 chhîm（鑱） tōa-chhîm	28	慢走 （Man Kia）	慢行 bān-kiâ^{n}
14	小錞 （Hsiao chhim）	小 chhîm（鑱） sió-chhîm	29	コーツーナア 漕ぐ者	划船的 kò-chûn-ê
15	拍子（Phek）	拍 phek			

「漢羅／教会羅馬字」欄は、オンライン版の「新版台華辭典」（台文／華文線頂辭典 http://210.240.194.97/ungian/soannteng/chil/Taihoa.asp）に基く。漢羅の表記の一部は中華民國教育部國語推行委員會編「臺灣閩南語常用詞辭典」（http://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/default.jsp）を参考にした。

厦門の歌妓
"Chinese singing girls" 厦門美璋照像館発行。1910 年代（河野蔵）

る。料金は『南方紀行』にある通り一〇元。厦門では北管歌妓（堂子班）が集まる寮仔後のみに見られる習慣であったが、春夫は鄭がメモ帳に記したこの花柳語彙を、音楽用語と勘違いしたのである。

〈Khui le poa〉もやや複雑だがほぼ同様のミスである。恐らく春夫は、ノートに手書きされた「khui-tê-pôaⁿ」（開茶盤）の「t」の一画を見落とし、「l」と誤ったのだろう。「開茶盤」は「打茶圍」táⁿ-tê-ûi に等しく、〈堂裏所有妓女皆出招待。可令唱戯二三齣。有煙茶菓品共客〉[4]ということを指す。すなわち、〈数人の女たちがどやどやと出て来て、皆、先づ林正熊に話かけながらそれぞれの女がそれぞれに一摘みづつの瓜子——例の西瓜の種を乾したもの——を私たちにくれた〉と春夫が書いているサービスがまさに「打茶圍」だったのである。春夫はこれも、〈北館の開天冠に相当する南館の打茶囲〉という言い方で、南方音楽の代表曲を指す音楽用語と誤解したのであった。しかも、メモが十分でなかったためか、同義語ながら発音と対応しない別語彙の漢字を説明に宛てたのである。

これらは確かに誤りではあるのだが、鷺江の満月の晩、貴公子の林正熊を中心に大勢の歌妓を侍らせた華やかな宴席で、春夫は必死に閩南語に耳を澄ませ、慣れない英語で繰り返し鄭享綬に説明を求めながら状況を理解しようとし

ていたことが分かる。作家らしい努力をここに汲み取るべきであろう。一方、浮かれた雰囲気の中で、鄭もまた極めて親切に春夫の問いに答えていたことが、この章に残されたかなり正確な教会ローマ字式表記から窺い知ることができるのである。

現実の「許卓然」hí-toh-jiân を〈許督蓮〉hí-tok-liân に誤るという、日本語では通常理解できないようなミスも、ノートにメモした教会ローマ字式表記の「h」を「k」に、「j」を「l」に読み誤り、後から別人のアドバイスで漢字を当てはめた場合に起こりうるミスである。つまりそこには、漢字と厳密な対応関係を持たず、教会ローマ字式という特殊な表音式の書記体系を持っていた閩南語独特の書記方法の問題が顔を出している。またこのミスには、失われた取材ノートを埋めていたはずの肉筆の筆勢をまざまざと想起させるものがある。後から参照して字画を読み誤るほどの走り書きには、書物による情報摂取とは違う、異文化接触の最前線の痕跡が充満していたはずなのである。

三　『南方紀行』関連人物誌（附録続稿）

（四）周坤元

福建省思明県出身。鼓浪嶼の尋源中学を卒業後、養元小学校長。一九二二年九月、養元小学・尋源中学と同じ米国帰正教会経営のホープカレッジ（米国ミシガン州）三年次に編入、一九二四年六月同校を卒業。[5] コロンビア大学ティーチャーズカレッジに進学し、翌年教育学修士号を取得。[6] 帰国後の一九二九年から一九三三年まで尋源中学（一九二五年漳州に移転）の校長を務めた。[7] その後、福建造紙廠総務課主任として実業に携わった期間があるが、日中戦争勃発による工場閉鎖で出国。[8] 緬甸（ビルマ）の仰光（ヤンゴン）華僑中学校教務主任、のち新加坡（シンガポール）華僑中学に転任、その半年後、一九四一年マレーの吉隆坡（クアラルンプール）中華中学に校長として招聘された。人柄は穏やかで親しみやすく、同僚生徒の信頼を集めたが、腸熱症に倒れて三週間の医治も虚しく、一九四一年六月一一日正午、文良港（セタパク）中央医院にて急逝。鼓浪嶼に老母が、ヤンゴンに妻子が、シンガポールに長男が残された。[9]

周坤元
（？～1941）

春夫が鄭享綬の友人である周校長の世話で養元小学の職員宿舎に滞在したのは、厦門渡航三日目の一九二〇年七月二四日から、漳州に発つ八月一日朝までの約一週間である。『南方紀行』によれば、春夫との会話は英語だったと言う。

滞在初日、周は小雨の中を厦門まで春夫と鄭を出迎え、また漳州行の際には案内人として朱雨亭に連絡し、名刺に紹介状を書いて春夫に渡している。春夫は作中で周を〈厦門で私を深切に取扱つてくれた人のひとり〉と呼び感謝している。[10]

尋源中学時代の周坤元が、鄭享綬らと共に倒袁運動に呼応した革命シンパだったことは前稿に述べた通りである。二人が学生軍として参加予定だった一九一六年二月二日の「厦門起義」が未遂で潰えた後、袁世凱の死によって倒袁運動は一段落を告げたが、周はその後も革命勢力への支援を続けた形跡がある。例えば、許卓然（『南方紀行』の〈許督蓮〉のモデル）が林翰仙（フィリピン華僑）の支援で発行していた反政府系新聞『民鐘報』（一九一六年一〇月一日創刊）が、福建督軍・李厚基の忌諱に触れ、一九一八年五月二八日の摘発で出版停止に遭った際、周校長はその関係者を養元小学の宿舎に匿い、彼らの厦門脱出を幇助している。[11] 春夫と鄭享綬が同じ宿舎に滞在する二年前のことである。当然周はその時の模様を鄭に熱心に語ったはずで、同席した春夫はその話題をもとに『南方紀行』の「漳州」章を書いたことになる。『民鐘報』の主な出資者は、ヤンゴン・シンガポール・クアラルンプール在住の南洋華僑であり、許卓然がその連絡係に当たっていた。周が後に南洋方面へと戦火を逃れた事情には、『民鐘報』時代に築かれた人脈との関与も想定できるかも知れない。

教育者としての周の風貌は、養元小学の卒業生で園芸学者の李来栄（一九〇八～一九九二）が次のように伝えている。〈周坤元という先生を覚えている。彼は我々に背筋を伸ばすよう厳しく求め、毎日壁際に立たせては猫背を矯正した。彼は言った。「君たちは大きくなったら教師になるだろう。大使や外交官になる者もいるかも知れない。国を代表して演壇に立ち、外国人と渡り合うのだから、必ず背筋を伸ばして堂々と威厳を示せ。国家の体面を汚してはならない。」この指導で私は民族の自尊心を啓発された。数十年来ずっと心に深く刻み込まれている〉。[12] 別な文章でも李は、周が手鼻をかんだり地面に唾を吐いたりする演技を生徒に見せることで悪習慣を自覚させたり、階段の踊り場に姿見を設置して、ここを通るたびに生徒自身が横から自分の立姿を点検できるよう工夫したりと、自己教育を徹底させる指導方針だったことを伝えている。[13] さらに周は病に倒れる直前の一九四一年五月四日、クアラルンプール青年協進社の式典で、五四運動の顚末を詳細に語り、現代青年を鼓舞したと報じられている。[14] 民族意識と国際意識を兼ね備えた、紳士的で凛とした新時代の教師像を髣髴とさせる。

（写真は *The Milestone: Hope College Year Book*, 1923）

（五）徐朝帆

徐朝帆
（1889～1941）

一八八九年八月一九日、台北の西、枋橋近在の擺接堡深坵の農家に父徐清華、母陳阿教の四男として生れる。枋橋公学校（一九〇八）、台湾総督府農事試験場乙科（一〇）を卒業後、枋橋公学校枋蓁分校（一一）、漳和公学校（一二）、枋橋公学校（一五）の雇として教壇に立つ。この間、地方学事講習会（一一）、台湾総督府国語学校臨時農業教員講習科（一三）を受講して研鑽を積み、その成績が認められて一六年無試験検定で台湾公学校訓導免許を受けた。[15]

厦門旭瀛書院勤務の辞令は一八年三月三一日発令。[16]以来、三二年五月三一日に家事都合で依願退職するまで、[17]勤続一四年に及んだ。帰台後は貸地業の傍ら板橋街協議委員などを務めるが、一九四一年四月五日、五三歳で歿した。[18]

春夫と出会った一九二〇年当時は数えの三二歳。鄭享綬が先に帰台するため漳州見物の通訳が必要になった春夫は、七月二九日、旭瀛書院の岡本要八郎院長を訪ね、徐朝帆・余錦華の二人を紹介される。八月一日午前七時、鎮邦街の新高銀行前で春夫と待合せ、三日まで行動を共にした。

『南方紀行』第六章の「漳州」で徐を描く春夫のまなざしには二つの側面がある。案内人兼通訳として同行しながら、漳州には不案内であり、また現地の反日感情を警戒して十分な役割を果たせなかった徐と余に対し、〈この人たちは一たい妙に先生気質で人に物を問ふのを喜ばない風がある。同時によく知らない事を問はれるのをも嫌がる〉と春夫は不満を漏らしている。だが一方では、漳州近郊の開けた平野を眺め、〈これは肥沃ないい土地です。台北あたりの田舎より、農作にはずつといいに決つてゐる〉といかにも楽しげな嘆声を放ったり、仰止亭の故事に感心して急に興味を覚えたりする徐の無邪気さや一途な勤勉さに好意的な眼差しを送ってもいるのである。

徐朝帆の名は、「中国もの」の代表作である「星」の題材提供者として春夫研究では重要である。『南方紀行』によれば、「星」は八月二日の晩、漳州宏仁医院の二階に枕を並べて徐が語ってくれた話から構想したものだという。この話は「歌仔戲（コアヒイ）」koa-á-hi と呼ばれる福建・台湾地方の民間演劇の題目として有名な「陳三五娘」に基づいたものである。現地住民の視線を気にする必要のない場所では、徐は春夫に対して十分に親切を尽くした。彼は確かに、閩南文化の案内人として春夫文学に大きく貢献したのである。

林珠
（1894～1939）

徐朝帆はその後、「星」と似た状況を自らの家庭で経験することになる。徐の妻・林珠（一八九四～一九三九）は職場の同僚で、一九一〇年台湾総督府附属女学校技芸科を卒業した才媛であった。一三年四月の入籍後も夫妻常に同じ教壇に立ち、一八年の厦門赴任も同時だったが[19]、肺尖カタルと診断され二六年に依願退職[20]。長く療養生活を余儀なくされた。二人の間には翠娥（一四生）・翠薇（一六生）の二女があったが男子がなく、朝帆は退職帰台後、珠の合意のもと板橋林本源の九姨太の養女・張來成（一九一五～一九五二）を第二夫人として迎え、世雄（三四生）、世昭（三七生）、雪子（三九生）の二男一女を得た。努力家の元教員で煙草・酒も嗜まず、兄弟にはその厳格さが恐れられた朝帆であったが、四二歳で儲けた長子世雄の誕生には手放しの喜びを隠さなかったという。そしてこの第二の結婚は、珠が積極的に仲立ちすることで成ったと伝えられている[21]。

「星」では、第一夫人の五娘が第二夫人の益春に心を移した陳三の愛を取り戻そうとして悲劇が起こるが、林珠の場合、自ら譲る形で來成との結婚を朝帆に勧めている点が大きく異なる。しかし、珠に五娘の侘しさが全くなかったはずはなく、二七歳で夫に先立たれ三人の子を育てた來成にも、益春に劣らぬ苦労があったに違いない。年代的に「星」の題材提供とこの件に直接の関連性はないが、作品が描いたのは、家系の存続を最も重視した時代にこの地方に珍しくなかった家庭の情景であり、その中に生きる女性たちの苦悩と悲哀であったと言える。（写真は徐世雄氏提供）

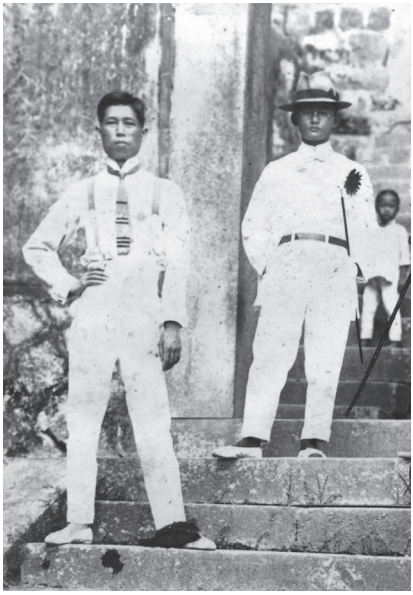
（六）余錦華

余錦華
（1898～？）

一八九八年一月二六日、新竹街西門に生れる。一九一七年三月、台湾総督府国語学校公学師範部乙科卒業と同時に公学校訓導免許を受け[22]、同年新竹庁後壠公学校に赴任[23]。一九二〇年四月一九日付の辞令で厦門旭瀛書院に転任する[24]。しかし一九二三年春から体調が優れず、神経衰弱のため八月二九日付で依願退職した[25]。その後、厦門台湾公会職員として「台呉案解決委員会」の書記に名を連ねているが[26]、正確な在任期間や帰台の時期を含め、その後の足取りはよく分かっていない。

徐朝帆と共に春夫の漳州行に同行したとき、余錦華は作

中にある通り二三歳。厦門赴任からわずか三か月半しか経っていなかったため、漳州に不案内だったのも無理はない。〈何を見ても、唯「暑い、暑い」とばかり言ってゐて、何時もきよとんとしたつまらなささうな顔をしてゐる〉と評されている。また、春夫が街で見た様々な景物について説明を求めようとしても、〈あまり日本語で話をしない方がいい。皆、日本人を嫌ってゐるから〉とたまり兼ねたように言って迷惑そうに見えたという。日本権益に守られて勢力を拡張しつつあった台湾籍民は、福建省の地元住民との間に摩擦を生じやすい微妙な立場にあった。とりわけ反北洋政府派である南軍の陳炯明が統治する当時の漳州は、反日感情の強い地域として認知されていた。一見過剰に見える徐や余の警戒にも相応の理由があり、必ずしも彼らが不親切だったという訳ではない（本連載の（一）を参照）。むしろ台湾籍民が日本人（内地人）と大陸を旅行する際、いかに神経質にならざるを得なかったかを作品から読み取るべきだろう。中国籍で地元意識があった鄭享綬の気楽な案内との差異も、彼らが台湾籍であったことに主な原因があるはずである。（写真は徐朝帆旧蔵アルバムに見える旭瀛書院職員の中から、台湾総督府国語学校卒業写真[27]との照合によって判定したもの。徐世雄氏提供）



厦門白鹿洞にて
徐朝帆（左）と余錦華（右）

四　人物及事項註釈（補遺）

東熙市（人物誌二）

東熙市の経歴については、本連載（三）で概略に触れ、前述の「佐藤春夫、台湾で居候になる―インタビュー・東熙市一家の記憶から―」に詳細年譜を掲載した。その後、東が一九二八年、台湾総督府技師任用の際に作成した自筆履歴書が残っていることが分かり、[28]ここからいくつかの新事実が判明している。

まず、東は一九一四年一一月一八日に歯科医師免許証を

下付された後、一九一五年六月まで〈於同校歯科医学研究〉、〈同年十二月一年志願兵トシテ入営〉、一九一六年一二月一日〈除隊〉、同一二月から〈神戸市朝比奈医院ニ於テ歯科医学研究〉、そして一九一七年八月に〈渡台／高雄ニ於テ歯科医開業〉と記載している。

神戸市朝比奈医院については新情報である。海岸通一ノ二にあった著名な歯科医・朝比奈藤太郎（後に大阪歯科医学専門学校校長）の研究所を指すものと考えられる。[29] しかし卒業直後の動向は正確ではない。一九一五年一月の『歯科学報』に掲載された転居先〈台湾基隆、抱歯療院方〉[30]は抱平三郎（一九一六年中に病歿）[31]経営の診療所として基隆に実在したことが分かっている。岡本要八郎の教え子で、新竹や厦門で開業した陳永石樹もここで技術を習得した。[32] また、打狗（高雄）での開業は、一九一七年五月一五日に東が岡田医院歯科部（院主岡田次太郎、又の名を隆弘）で診療を開始した旨の報道が見つかっている。[33] これらのリアルタイムな情報の方がより正確である。

ただし、履歴書に見える一九二〇年八月〈春夫滞在中〉〈任陸軍歩兵軍曹〉、一九二三年三月二六日〈臨時歯科医ヲ命ス（厦門医院）〉、同年七月九日〈御用済ニ付解職（同）〉、同年八月二三日〈厦門医院副医長ヲ命ス〉、一九二四年四月三〇日〈任台湾総督府技手〉などの情報は、軍務・官職に関わるものとして、信頼できるはずである。

鄭享綬（人物誌三）

一九一六年二月二日の「厦門起義」が未遂に終わった後、鄭享綬がどのようにして台湾打狗の東熙市と知り合い、歯科の技工助手として働き始めたのか、詳しい所は分かっていない。だが、この間の空白を埋める新しい事実が明らかになっている。

洪卜仁主編『厦门体坛百年』所収記事[34]によれば、鄭享綬は一九一五年一一月二七日、演武場（現厦門大学附近）で開催された第一回厦門運動会に尋源書院代表として出場して優秀な成績を収め、翌年一二月九日の第二回厦門運動会で、二二〇ヤード競走、四四〇ヤード競走、一二ポンド鉄球など四種目で優勝し、最優秀選手に選ばれている。この活躍から鄭は、一九一七年五月八日から一二日に東京芝浦で開催された第三回極東選手権大会（極東オリンピック・遠東運動会）の中国代表選手に抜擢され、四四〇ヤード競走・八八〇ヤード競走に出場した。その際の記録は不明である。

上記によれば、鄭享綬は少なくとも一九一七年までは尋源書院に在籍していたことになる。鄭が優秀なスポーツマンだったことは、酒に強く強靭な体力を持つ『南方紀行』

の〈鄭〉の風貌とも確かに符合する。

鄭享綬自身が書いた「兒童與牙齒」と題する文章も見つかった。集美学校系列の出版社が発行していた教育雑誌に掲載されたものである。[35] 子を持つ親に歯の衛生管理の必要性を訴え、子供の虫歯を防ぐのに有効な食習慣を解説した歯科医の文章であるが、歯の健康に対する中国人の意識の低さを欧米先進国の意識の高さと比較したり、虫歯の毒素が血中に侵入して惹き起す健康被害に触れたりしながら、〈虫歯によって半数の児童は駄目になっている。彼らの多くは虚弱体質で、目は虚ろである。そんなことで将来強い身体と深い学問が得られようか？　二百名中にこのような者が大多数を占めるという状況が、もし全国の学生にも同様に当てはまる比率だとしたら、堅強な民族がそこに期待できるのか！　そんな危険性を斥けるには、父母たる人が励行と保護の責任を持たねばならない。そして全民族に注意を呼び掛けるには、社会に立つ人が宣伝に努めなければならないのだ〉とこの文章を結んでいる。民族主義の高潮を時代背景に持ちながら、近代医術を習得した者としての社会的責任に目覚めた人物だったことを窺わせる。

南華旅社

『南方紀行』には、春夫が厦門上陸後二晩投宿した南華旅社の建物についての詳しい描写がある。その客室は、〈部屋の天井といはず四隅と言はず蜘蛛の巣が一面で、それは煤を蓄めて真黒くなつて、その煤の重みに堪へられないので黒い房になって天井からぶらさがつてゐる〉という状態だったという。春夫はここで二晩目に、寝台に豚の背骨を仕込まれる嫌がらせを受けたとも書いている。〈私が日本人と見てとつてこんな怪しからんことをしたものだと見える〉。そもそも部屋の唯一の装飾と言える〈喜鵲牌香煙か何かの広告びらである三色版の上海風俗の美人〉というのが、中国人の愛国心に訴えかける広告戦略で販路を広げた南洋兄弟煙草公司のポスターであった。春夫は外国煙草の広告で埋め尽された厦門港の外貌と、ネイティブタウンの中心で民族意識のエネルギーを蓄えていたこの旅館とを対比的に描き出し、激しい経済戦争の舞台であった厦門の二つの顔を捉えることに成功している。[36]

水仙宮街にあった南華旅社の実態については、これまでほとんど不明であったが、同旅館の破産に関する記事の存在が新しく判明した。[37] それによれば、南華旅社は一九一九年、水仙宮街に開業。建物は元警察局で、北洋軍閥李厚基（福建督軍）部下の史廷颺（警察局長）から、台湾籍民黄迺川に九千元余で払い下げられた。黄は最初これを月額一四〇元で貸出したが、利益の独占を狙う出資者の競争に

より、家賃は二四〇元まで高騰したという。南北軍の前線だった厦門では、最初の五六年こそ軍政界の往来に南華が利用されて賑わったが、その後出資者中の福建籍民が新興旅館に投資先を変えたため資金不足が深刻化。建物は狭く老朽化が進んだ上、市区改正後の旧水仙宮街が場末地になったことも相まって、滞納家賃は累計二千元余に達した。一九三六年に破産。開業一八年程度ですでに厦門の老舗扱いになっていること自体が、この業界の浮沈の激しさを物語っている。

春夫は作中で、〈広間の手前に帳場のやうなものがあり、その向うに「U」の字形の階段がある〉という旅館としては不自然な建物の造作に注目しているが、元の警察局をさほど手入れもせずに転用したのだろう。中古物件であれば、春夫滞在の前年に開業したばかりでも傷みや汚れが目立ったことはあり得る。また建物のオーナーは台湾籍だが、旅館経営の中核は福建籍民だったらしく、南華に「排日」的な雰囲気があったとしておかしくはない。

なお、別資料によって分かる一九三二年当時の住所は水仙路五四号、経営者は柯霖藩[38]。先の新聞記事によれば、一九三一年に水仙宮街の道路が拡幅されて水仙路が成立した後も、南華旅社は開業時の場所から動かなかったらしい。

（続）

附記

本稿の内容の一部は、二〇一六年六月二五日、厦門大学で開催された「〝东亚内部的自他认识〟学术研讨会」（厦门大学外文学院日语系主催、日本国際交流基金北京日本文化中心後援）での発表に基づくものです。会場で貴重なご意見を賜りました方々にあつく御礼申し上げます。

徐朝帆ご長男の徐世雄氏ご家族、ならびにご親族の蔡懐哲氏には、写真資料や族譜その他家族資料を快くご提供いただき、厦門の洪卜仁先生には、二〇一六年六月、六年ぶりにお目にかかり、直接懇切なご教示を頂戴しました。

取材スケジュールの調整や通訳には蔡維鋼氏のお力添えが欠かせませんでした。また厦門では呉光輝氏、郭立欣氏に多大なご協力をいただきました。

ここにお名前を掲げて、皆様のご厚意に心から感謝申し上げます。

なお、掲載写真や図表の転載はご遠慮ください。本研究はJSPS科研費26770086の助成を受けております。

（二〇一六、一二、五、台北中央研究院學人宿舍にて）

註

（1）佐藤春夫「楽しい気持にならないと」（『文章倶楽部』

一九二九・一、臨川全集二〇・一九七頁）

（2）『中國旅行指南　第四版』（一九一五・一〇、商務印書館、一二九頁）

（3）陳佩眞・蘇警予・謝雲聲編『厦門指南』（一九三一・五、厦門新民書社、第七篇一八頁）

（4）陳佩眞・蘇警予・謝雲聲編『厦門指南』（一九三一・五、厦門新民書社、第七篇一八頁・第一〇篇一九頁）

（5）Chiu, Khun Goan（Amoy, China）の名は、『ホープカレッジ年鑑』一九二二・三年版の Junior Class の学生名簿に初めて登場する（*Hope College Bulletin: 1922-1923*, vol.60, No.4, 1923.2, p52）。また同一九二四・五年版の一九二四年学位取得者名簿中、文学士（Bachelor of Arts）学位取得者中にも名がある（*Hope College Bulletin: 1924-1925*, vol.62, No.4, 1925.2, p77）。

（6）*Columbia University Bulletin of Information*, 1925, p340

（7）常家祜「寻源书院迁出鼓浪屿之后」（『厦门轶闻史话实录』二〇〇二・一一、六六頁）

（8）中国人民政治协商会议福建省委员会文史资料编辑室『福建文史资料第二〇辑』（一九八八・一二、四〇頁）

（9）「中華中學校長周坤元日前病逝」（『南洋商報』一九四一・六・一三、三一面）

（10）中編「剪られた花」の一部「空しく歎く」（『改造』一九二二・二）。『南方紀行』に第六章「朱雨亭の事、その他」として採録された部分に見える（臨川全集四、一〇七頁）。

（11）李硕果「厦门《民钟报》创办始末」（中国人民政治协商会议厦门市委员会文史资料研究委员会编『厦门文史资料第一〇辑』一九八六・九、七五頁）

（12）李来荣「艰苦的学习历程」（天津人民出版社編『我的大学生活』一九八五・七、天津人民出版社、七〇頁、拙訳）

（13）李来荣「我的童年」（新蕾出版社編『科学家的童年2』〈童年文庫〉一九八三・二、新蕾出版社、九六～七頁）

（14）「青年協進社」（『南洋商報』一九四一・五・六、一三面）

（15）「教員免許狀授與（徐朝帆外二）」『臺灣總督府公文類纂』國史館臺灣文獻館藏、典藏號：000025210007。

（16）「昭和二年六月現在厦門旭瀛書院職員履歴書」、B04012110700（第七〇～七二画像目）在外日本人各学校関係雑件／在南支ノ部／厦門日本国民学校（B.I.1）（外務省外交史料館）。

（17）「徐朝帆（依願免本官；賞與）」『臺灣總督府公文類纂』國史館臺灣文獻館藏、典藏號：000102233089。

（18）『台湾日日新報』人事欄「板橋街協徐朝帆氏令孃翠娥年二十一」（一九三四・八・三、四面）及び家族提供資料による。

（19）「〔公立公學校訓導〕徐林氏珠（任台灣公立公學校教諭）」

『臺灣總督府公文類纂』國史館臺灣文獻館藏、典藏號：0000320902 2X002。

(20)「徐林氏瑞免本官、賞與、俸給」『臺灣總督府公文類纂』國史館臺灣文獻館藏、典藏號：0000405 7053。

(21)家族提供資料及び談話による。

(22)「國語學校卒業者ニ教員免許狀授與ノ件」『臺灣總督府公文類纂』國史館臺灣文獻館藏、典藏號：0000266 5a08。

(23)柴辻誠太郎『台湾総督府文官職員録』（一九一七・六、台湾日日新報社、二三二頁）。

(24)『創立二十週念記念誌』（一九三〇・一一、厦門旭瀛書院、二六頁）。

(25)「〔台灣公立公學校訓導〕余錦華（依願免本官）」『臺灣總督府公文類纂』國史館臺灣文獻館藏、典藏號：0000375 2105。

(26)「台呉案解決委員会報告書（訳文）」、B11090328400（第三五八画像目）大正十二年日貨排斥一件／南支状況（B3.3）（外務省外交史料館）。台湾居留民会三十五週年誌編輯委員会編『記念誌』（一九四二・八、厦門居留民会）の口絵に、解決時の記念撮影が掲載されている（最後列右端が余錦華と推定される。一九二四年）。なお「台呉案」とは、一九二三年九月一八日、貸金取立のトラブルが、厦門の港湾労働を取仕切る呉一族と台湾籍民との銃撃抗争に発展したもの。

(27)『台北師範学校創立三十周年記念写真帖』（一九二六・一〇、台北師範学校）に収録。

(28)「東熙市任總督府技師、俸給、勤務」『臺灣總督府公文類纂』國史館臺灣文獻館藏、典藏號：0001005 1110X001。

(29)血脇守之助編『歯科医師宝典』（一九一六・一〇、歯科学報社、一三八頁）。

(30)「同窓会報告／会員転居」（『歯科学報』一九一五・一、七四頁）。

(31)「石坂文庫の新書」（『台湾日日新報』（第二版）（一九一五・一一・九、二面）及び「収容所寄附」（同一九一六・一一・一五、七面）。

(32)連雅堂序『人文薈萃』（一九二一・七、遠藤写真館）。厦門台湾居留民会編『厦門台湾居留民会報（三拾週年紀念特刊）』（一九三六、厦門台湾居留民会）の巻末広告に〈厦門中山路一九／福建歯科医院／医師　陳永石樹〉と見える。

(33)「地方近事／打狗岡田医院」（『台湾日日新報』一九一七・五・一八、三面）。

(34)「追寻轰动厦门的赛事」（『厦门体坛百年』厦门大学出版社、二〇〇八・六、八～九・一一頁）。この記事の内容には、二〇一六年六月五日開催のシンポジウム「佐藤春夫與臺

灣」（於國立臺灣文學館）で、パネリストの許俊雅氏（臺灣師範大學）が言及されている。ただしデータベース検索によるものとして引用の典拠は示されなかった。私自身別途出典を調査し、この文献の存在が分かった。編者の洪卜仁氏に取材した所、情報の出典は当時の新聞記事であったが、文革中に失われ、洪氏自身が作成しておいたメモに記録が残っていたのだと教示を受けた。なお、鄭の具体名は見えないものの、米国帰正教会の厦門ミッションによる年間レポートのうち、尋源書院（Talmage Collage）の躍進として一生徒の運動会での活躍が報告されている。第二回厦門運動会の日付に異同がある。〈On Dec. 8, in the 2nd Amoy Athletic Meet they came out second among the six schools that entered, and one of our boys easily carried off the first prize for the best all-round athlete. There is a possibility of his being entered in the Far Eastern Olympic Games to be held in Tokyo in May, 1917.〉（*Board of Foreign Missions: 85th Annual Report*, ed. Reformed Church in America, 1917, p14）。

(35) 鄭享綬「兒童與牙齒」（『初等教育界（集美初等教育社）』一九三三・一〇、三〇～三三頁）。

(36) 詳細は拙稿「佐藤春夫『南方紀行』の路地裏世界―厦門租界と煙草商戦の「愛国」」（『戦間期東アジアの日本語文学』（アジア遊学一六七）二〇一三・八）を参照されたい。

(37)「厦門旅館業之衰落／遠東南華將宣告破産／他方掙扎終難久持」（『南洋商報』一九三六・三・五、二〇面）。

(38) 工商廣告社編纂部『厦門工商業大觀』一九三二・六、厦門工商廣告社、六〇頁）

（こうの　たつや・実践女子大学准教授）